

■ 修士論文要旨

ジャズにおける市民性について

— 共通する歴史性・精神性・機能性 —

The Jazz and Citizens

-Common philosophy of history, spirituality and functionality-

神奈川大学大学院 経営学研究科
国際経営専攻 博士前期課程

佐野 恭平

SANO, Kyohei

■ キーワード

市民、自覚的市民、ジャズ、近代化

本研究の目的は、ジャズにおける市民性を見出し、言説によって証明することにある。筆者は、ジャズという音楽と市民という概念には、多くの共通項があるものだと考えている。本論では、ジャズを市民論の観点から考察するため、まず市民論の考察から始める。人間が市民であるとすれば、そこには市民としての存在意義と果たすべき役割が必ずあるはずである。その考察から、本論では第1に市民としての当為を明らかにする。その市民論の考察を踏まえた上で、ジャズの市民性についての考察へと展開する。そこから、ジャズは市民性をもった音楽といえるのかという、本論の主題について明らかにする。

民主主義国家は市民という存在を前提として作られており、同時に民主主義国家それ自体が人間を市民とするためのシステムでもある。両者は切っても切れない関係である。しかし、現代の日本政治は「市民不在の政治」や「おまかせ民主主義」という言葉で形容され、揶揄されている。それが今日の日本の市民社会であり、日本政治が恒常的

に指摘される課題である。そこには市民意識の希薄化と、市民性の機能不全が内在している。それを目の当たりにして、私は改めて市民について考察せねばならないという必要性を感じるに至った。

加えて、ジャズと市民の関係性について考察してゆく。ジャズはアメリカにて黒人音楽として発展し、民主主義国家を世界でいち早く具現化したアメリカを発祥とすることから、しばしば「民主主義的な音楽」と形容されることも多い。そのような民主主義的な性格を持つジャズであるからこそ、民主主義の基礎を築く市民論からのアプローチも可能であると考えている。なによりも民主主義と市民は不可分な概念であり、それは本論の主張であるジャズにおける市民性と多く重なる。また、ジャズは近代化した音楽である。ジャズはその歴史において「モダン・ジャズ」と自明的に「近代」と名乗ることとなった。モダン・ジャズのその音楽的特徴は、演奏者個々人の自由な即興演奏を可能とすることにあり、個人の表現の自由を前面に押し出す音楽となったことにある。モダン・

ジャズの音楽的特性は、市民特有の市民理念や市民理性と共通の精神を有するものである。そのモダン・ジャズと市民論の構造には共通点があり、多くの部分でオーバーラップするものと考えられる。それを私は「ジャズの近代化」と呼ぶこととする。

以上をもって、本論文は全4章で構成されており、各章の概要をまとめると以下のとおりとなる。

第1章では、本論の概要と研究の動機、研究の目的、研究の過程について述べる。

第2章では、市民は普遍的な主権者としての身分であることを前提とし、市民に与えられる市民権の議論を提示する。市民権の議論は歴史的に見ると、伝統的に2つの主義によって繰り広げられている。第1は、権利に主眼を置く「自由主義的市民権」、第2は、義務に主眼を置く「市民共和主義的市民権」であり、この2つの市民権の性質について、その違いを把握する。その議論をもとに、市民権の獲得の歴史—つまり普遍的市民への変遷の過程—について、その社会構造の変化の視点から身分・階級・階層の3段階に分類した考察と同時に、市民権の実質的行使可能性について考察する。そこから、現代の当為としての市民像である「自覚的市民」という概念を提示し、2章を結ぶ。

第3章では、第2章で考察した市民論からジャズにアプローチをかけた考察へと展開する。ジャズの近代化について、まず音楽面での変化を「ジャズのモダニズム運動」という芸術運動の観点からの議論を提示し、本論で扱うジャズである「モダン・ジャズ」と「プレ・モダン・ジャズ」の概要を示す。そこからジャズの近代化について、①歴史性、②精神性、③機能性、の3つに分類する。この3つの分類は、近代市民社会の成立過程とその後の市民論と重なるものと考えられる。①歴史性については、ジャズの近代化という歴史的な変革について、近代化される前のプレ・モダン・ジャズとの比較とその人間関係の変遷過程から考察する。②精神性については、モダン・ジャズの演奏スタイルについて、市民精神との共通点を探る。

③機能性については、モダン・ジャズにおけるプレイヤー同士の共和的感覚が共同体にもたらす機能について考察する。それら各々の市民的性質を分析し、ジャズと市民性の整合性について考察する。

4章では、本論の結論を示す。また、筆者の個人的な経験をもとにジャズにおける市民性について若干ながら提示し、本稿を締めくくる。